

政治的言語を考察するための枠組みについて

大河原, 伸夫
九州大学大学院法学研究院 : 教授

<https://doi.org/10.15017/20582>

出版情報 : 法政研究. 78 (3), pp.85-108, 2011-12-20. 九州大学法政学会
バージョン :
権利関係 :

政治的言語を考察するための枠組みについて

大河原 伸夫

はじめに

一 表現の比喩性

二 表現と概念メタファー

おわりに

はじめに

いかなることを政治ととらえるにせよ、言語使用が政治の重要な部分を成すことは確かであろう。政治的言語を考察するための一つの枠組みは、〈字義通りの意味を持つ表現〉と〈説得・支持調達・動員のため使用される比喩的表現〉という二分法から成る。^① 本稿においては、それに代わる、三分法から成る枠組みを取り上げる。これは抽象概念の構築に關するG・レイコフ (Lakoff) とM・ジョンソン (Johnson) の一連の認知意味論的な研究―「概念メタファー」論―で提示されてきたものである。^②

論 説

彼らの議論を、次の四点にまとめよう。

(一) 抽象概念は、身体的経験に直接根ざす概念に基づいて構築される。たとえば「痛み」(目標 (target)) 概念は、「存在物」(「起点」概念) に基づいて構築される。その結果、「存在物」の要素(たとえば、なくなり得るもの)が、「痛み」の要素をも成すようになる。(そして、「痛み」という「メタフォリカルな物」が指定されるに至る。)

(二) 「概念メタファー」は、「目標」概念が「起点」概念に基づいて構築された結果生ずる、それぞれの要素間の対応である。概念メタファー「目標は目的地 (PURPOSES ARE DESTINATIONS)」は、「目標」の要素と「目的地」の要素の間の対応である。概念メタファー「社会集団は容器 (SOCIAL GROUPS ARE CONTAINERS)」は、「社会集団」の要素と「容器」の要素の間の対応である。

(三) 抽象概念が「存在物」などに基づいて構築され、概念メタファーが成立することは、通常意識されない。それ故に概念メタファーに由来する「メタフォリカルな表現」(たとえば「痛みが消えた」)は、比喩的とは認識されず、字義通りの意味を持つと認識される。この点を踏まえれば、言語表現について、〈字義通りの意味を持つ表現〉(「風船が上がった」)、〈概念メタファーに由来し、字義通りの意味を持つと認識される表現〉(「彼は理論を構築した」)、及び〈比喩的表現〉(「彼の理論はガーゴイルでおおわれている」)という三分法が成り立つ。

(四) 抽象概念の「存在物」などに基づく構築を通じ、「現実」が構成される。(文化によっては、「時間」の「有用な物」に基づく構築を通じ、「時間」を「与える」あるいは「無駄にする」ことは「現実」の一部となる。) 既存の概念メタファーの批判的検討は、「現実」の批判的検討の手段を成す³⁾。

さて、抽象概念(たとえば「権力」)は、政治的言語の重要な要素である。抽象概念を含む個々の表現の背後にある概念メタファーを特定すれば、政治的「現実」の一面―身体的経験を基礎として、意識されないうまま構成される側面―を浮き彫りにすることができよう。(この点は、「おわりに」で再び取り上げる。) もちろん、概念メタファー論の政

治的言語の考察への適用における関心は、多様であり得る。しかし、そうした適用の際に焦点を合わせる表現は、〈字義通りの意味を持つと認識される〉、〈抽象概念を含む概念メタファーに由来する〉という二つの条件を満たすものでなければならぬ。⁽⁴⁾

政治的言語の考察にレイコフらの概念メタファー論を用いようとする、様々な試みが為されてきた。最近(二〇〇八年以降)刊行された書籍⁽⁵⁾としては、Ahrens 2009 (所収の論文十二点のうち七点)、Carver and Pirkalo 2008 (所収の論文十八点のうち七点)、及び Musolf 2010 が、概念メタファー論の適用を試みている。しかし、前記の二条件を満たす表現に着目していると無条件に述べ得るものは見あたらない。⁽⁶⁾ 言語表現に関し概念メタファー論が提示する三分法は、政治的言語の考察に未だ充分に活かされていない。

本稿においては最近刊行の書籍三点を取り上げ、それらについて、前記の二条件を満たす表現に着目していると無条件に述べ得ないことを具体的に示す。概念メタファー論を政治的言語の考察に用いる際、焦点を合わせるべきはそうした表現であると確認すること―それが本稿の目的である。

以下、「一」で、着目している表現が〈字義通りの意味を持つと認識される〉という条件を満たしているかという角度から、また「二」で、着目している表現が〈抽象概念を含む概念メタファーに由来する〉という条件を満たしているかという角度から、諸文献を検討する。なお、諸文献が概念メタファー論の提示する三分法を充分に活かしていないと指摘しても、政治的言語の考察としてそれらが持つ価値を疑問視しているわけではない。

一 表現の比喩性

まず、「政治」の構築について論ずる Honohan 2008 及び Stenvoll 2008、「モデル」を取り上げる Yanow 2008、「権

力」について論ずる Meier and Lombardo 2009 など、七点の文献を検討しよう。これらは、〈比喩的表現〉に着目している。

Honohan 2008 は、前おきで「メタファーは政治的言語に単に装飾を施すのではなく、政治という分野そのものの構築に関与する」と述べ、Lakoff and Johnson 1980 に言及している (pp.69-70)。しかし本論で取上げているのは、①「政治的共同体の概念的・実際的理解を表現するメタファー」としての「統治体 (body politic)」及び「国家という船」(pp.70-71)、②「国民」に関する「様々な家族メタファー」特に目立つのは母国あるいは祖国のメタファー」(p.73)、③「家族のメタファーの」代替物としてしばしば提案されるメタファー」としての「市民的『友情』」(p.75)、④「現代政治、とりわけ選挙政治、において広く使用されている『チーム』のメタファー」(p.77)、⑤「学術的な政治学から取り出され、現実政治に吸収されたメタファー」としての「社会資本」(p.78) などである。「メタファー」は「政治という分野そのものの構築に関与する」と述べるとき、著者の念頭にあるのは概念メタファーではなく、〈比喩的表現〉である。

Stenvoll 2008 は、「セクシュアリティ、妊娠中絶、及び新しい生殖技術」(p.30) に関し、ノルウェー議会（一九五〇年代～一九九〇年代）で展開された「滑りやすい坂道 (slippery slope) の議論」⁷⁾ の分析である。著者は「滑りやすい坂道」及び類似の諸表現（「バンドラの箱を開ける」(p.28)、「ルゴンを渡る」(p.32)、「ドミノ効果」(p.35) など）に着目する。そして、これらは「人々の政治的理解・経験・実践の仕方を形づくる幾つかの概念メタファーの表現である」(p.35) と述べ、「政治は物理現象」などの概念メタファーを挙げている (pp.35, 39)。しかし、「滑りやすい坂道」等々は〈比喩的表現〉である。なお著者の関心は、(概念メタファーではなく)「言語使用」が「どのように政治を形づくるか」(p.39) という点にも向けられている。「滑りやすい坂道のメタファーは政治を物化し (reifies)、境界が不明瞭である抽象的な社会的存在物「政策など」を、境界が明瞭な物体とする」(p.39) と論じられている。

Yanow 2008 は「メタファー」を「のモデル (models of) 及び「ためのモデル (models for)」とどうも、二つの事例を分析している。

「のモデル」とは、「状況の「中略」まだ明確化されていない理解のモデル」である。「ためのモデル」とは、「状況の中で行動するためのモデル」である (p.226)。たとえば「住宅の腐朽 (housing decay)」という「メタファー」は、「住宅は、歯 (あるいは自然界の他の物質) が腐朽するのと同じように劣化するという観念」を具体化する。(「住宅と歯の間のアナロジーに明示的に頼ることができるようになる前に、「住宅と歯の間に」関連性があった。言語使用が両者の関連性を明確化した」)。またこのメタファーは、歯科医が問題のある歯を抜き新しい歯を入れるように、問題のある住宅を撤去し新しい住宅を建設することを、妥当な行動として含意する。「メタファーは、事前の理解のモデルから、後の行動のためのモデルへと進む」(p.226-228)。(なお著者は、「住宅の腐朽」というメタファーが、住民の「社会ネットワーク」を閉却した点を批判している (p.228)。

著者は、その「メタファー」論が「認知的理論 (たとえばレイコフとジョンソンが一九八〇年に、そして Lakoff and Johnson 1999 などその後の研究で、明確化した立場) に依存し、また、メタファーを行動の文脈で理解する ショーン (Schön) のプラグマティズム哲学「中略」にも依存する」と述べる (p.230)。しかし「モデル」としての「メタファー」に関する議論において着目されているのは、「住宅の腐朽」のような「比喩的表現」である。第二の事例分析において論じられているのも、イスラエルの「コミュニティ・センター」に関する「スーパーマーケット」という「メタファー」である。⁽⁸⁾

Meier and Lombardo 2009 は「男女不平等問題に関するオランダ及びスペインの政策文書 (一九九五年〜二〇〇四年) を素材とし、その中で為されている「権力」への言及を考察している。第一節(「序論」)は、次のように始まっている。「本章は、政治における男女不平等に関し、概念メタファーとしてパワーが用いられているか、「用いられている

とすれば」どのように用いられているか、という問題を検討する。「中略」中心的な仮説は、次の通りである。政治における男女不平等に関するこれらの「オランダ、スペインの」政策文書は、パワーへのアクセスに対する「ジェンダーに関する」重大な障壁を構成するかもしれないような、パワーの概念化を含んでいる」(p.235)。

第四節（「政治における男女不平等に関するオランダとスペインの政策文書中の権力及び概念メタファー」）の三箇所、政策文書中の「権力」への言及が、「メタファー」の語を用いて論じられている。

(一)「最も多く使用されているメタファーの一つは、政治的権力の座「中略」への『アクセス』というメタファーである。このメタファーにより、権力は密室―女性がそこにはいるには、そのドアが開かれなければならない―の中の何かであると我々は考える」(p.235)。レイコフらの議論に従えば、「権力」を「密室」中の「何か」と我々が（無意識のうちに）「考える」故に、「アクセス」という表現が用いられるということになる筈である。この箇所の「アクセス」は、「権力」と「密室中の何か」の類似性を示唆する（比喩的表現）であろう。

(二)「政治的な機関に女性枠を設けることは、権力構造への女性の接近「中略」に対する障害物を乗り越えるために提案されている解決策の一部である。「中略」興味深いのは、これらの文書で使用されている主要なメタファーが「中略」『バランスのとれたプレゼンス』、『バランスのとれた参加』「中略」などのキーワードとして登場することである。たとえば、政治に女性枠を導入する根拠は、しばしば、『バランスのとれたプレゼンス』のメタファー―それは、皿の上で男女が同じ重さを持っている秤のイメージを示唆する―を通じて示されている」(p.235)。ここで著者は、「バランスのとれたプレゼンス」等の「メタファー」を、「秤のイメージ」と結びついた（比喩的表現）と把握している。

(三) スペインの議会演説の中に、『権力』を、『分かち合う』べき『ケーキ』として提示する」ものがある (p.244)。演説中の「ケーキ」という表現は、（比喩的表現）である。

以上に見られるように、政策文書における「権力」への言及について、著者が着目するのは（比喩的表現）である。

Vertessen and De Landtsheer 2008 は、ベルギーの政治家のメタファー使用を、二〇〇三年の新聞記事及びテレビ放送を用いて考察している。著者によれば、「メタファー」研究には「二つの重要なアプローチ」がある。第一のアプローチにおいては、「メタファー」は「レトリカルかつ言語的な要素」である。第二のアプローチにおいては、「メタファー」は「認知的あるいは概念的な手段」であり、それは「思考を導く」。「概念メタファーは、おおむね気づかれないままである」。「レイコフ (Lakoff and Johnson 1980) のかなり最近の認知メタファー理論は、このアプローチの中で最も目立つものである」。このように述べた上で、著者は両アプローチを「結合」し、「メタファー」を「重要な認知的・感情的効果」を持ち得る「言語的要素」と把握する (pp.272-273)。そして、「スポーツ・ゲーム・演劇のメタファー」など六種類の「メタファー」に言及している (p.277)。以上に見られるように、「認知的・感情的効果」を持つものとして著者が着目するのは、〈比喩的表現〉である。

Musolf 2010 は「身体を基礎とする政治的メタファー」 (p.8) に注目し、ヒトラーの『我が闘争』及びナチスの宣伝を分析している (第一部)。また、中世以降の西洋文化史におけるそうしたメタファーを考察している (第二部)。

第一章「序論」で、「身体・病・寄生虫という『起点』概念に含まれる諸前提」と「ジェノサイドに関わるイデオロギー (及び慣行)」という『目標』レベルにおける政治的結論」の間の「認知的結びつき」が、「本研究第一部の中心」にあると述べられている (p.4)。また第五章「方法論的な反省」において、「身体としての国家あるいは国民という観念を取り巻く概念メタファー複合体の歴史的展開」を跡づけるためには、Lakoff and Turner 1989 など「初期の認知的メタファー分析」を発展させる、すなわち「文化・歴史的視点と認知的視点を結合する」必要があると論じられている (pp.74-76)。

さて、同書中最も詳細に分析されているテキストは、『我が闘争』である。第三章『我が闘争』における政治的カテゴリーとしての身体、自然、及び病気全体が、その分析にあてられている。同章で著者は、『我が闘争』中の「生物

学的・医学的・生理学的用語」「身体」、「血液」、「病氣」、「寄生生物」などを取り上げ、それらは「メタフォリカルに使用されている、すなわち、『本来の』生物学的・医学的主题ではなく、社会・政治的な問題に関わっている」と述べる (p.24)。また、ヒトラーは「ユダヤ人をできる限りネガティブに描写するという彼の目的」から、「血液に毒を注ぎ込む行為者」という表現を選んだと述べる (pp.27-28)。「我が闘争」からは、以下を引用している。「同じこと」「破壊的でない病氣は、人間はそれに慣れてしまうので、かえって危険であるということ」が国民の身体の病氣にもあてはまる」。ユダヤ人が支配する報道機関の「毒」は、「わが国民の血液に妨げられることなく侵入し、作用することができた。国家は、病氣を制するほど強くなかった」。ユダヤ人は「常に他の人々の身体の寄生虫」であった (p.25)。以上に見られるように、著者の関心は「比喩的表現」にも向けられている。

Ringmar 2008 は、中世以降のヨーロッパにおける「国家」理解の変遷を、中国・日本における「国家」理解にも触れつつ、概観している。前おきで、著者は次のように述べる。「メタファーは認知的な道具でもある (Takoff and Johnson 1980; Johnson 1981)。そのようなものとしてメタファーは、我々が世界を体系化するのを助ける「中略」政治において、メタファーはしばしば、エリートが批判を押しえつけ、人々に身の程を思い知らせるのに用いる道具である。しかし、メタファーにレトリカルな使用方法があると認めることは、我々がメタファーなしで済ませ得ると言うことではない。我々が使用するメタフォリカルな言語の先に隠れている、あるいはその背後に隠れている、社会の真なる記述は存在しない」(p.57)。著者はレイコフらの議論に言及するが、結局着目しているのは「比喩的表現」としての「メタファー」である。この点は、本論の次の箇所にも現れている。①「家族も、社会秩序の問題に対処するために用いられしてきた、人気のあるメタファーである。「中略」しばしば支配者たちは、自分を国の『父』と定義し、被支配者たちを年齢・成熟度が様々であるような『子供』と定義することが好都合であることに気づいた」(p.60)。②「一七世紀後半以降人気があった「中略」重要なメタファーは、『機械』として理解された国家である「中略」一八世紀ヨーロッパの

啓蒙専制君主たちは、このメタファーを特に好んだ」(p.63)。

以上、〈比喩的表現〉に着目する文献七点を検討した。次に検討する Hidalgo Tenorio 2009 及び Drušák 2008 が取り上げている表現には、〈比喩的表現〉及び前述の二条件を満たす表現が混在している。

Hidalgo Tenorio 2009 は、アイルランドの大統領 M・マッカーリス (McAleese) 及び総理大臣 B・アハーン (Aherm) の演説 (一九九七年～二〇〇七年) におけるアイルランドのとらえ方を比較している。「序論」で、著者は次のように述べる。「私は、アイルランドの男女の政治指導者のディスコースを形づくる概念メタファーを考察する。すなわち、表現で、『その「使用が」慣例的 (conventional)、『無意識的』、『そして』通常気づかれない』(□)は原文—引用者) (Lakoff and Turner 1989: 80) ものを考察する」(p.112)。

この論文には、前述の二条件を満たす表現を取り上げている箇所がある (pp.126-127 参照)。しかし、〈比喩的表現〉を取り上げている箇所もある。マッカーリス及びアハーンの演説の分析 (pp.121-132) の約三分の一 (pp.121-124) は、「ケルトの虎」という〈比喩的表現〉に焦点を合わせている。著者自身、これを「当初は独創的なものであったメタファー」と呼んでいる (p.122)。

また著者は、「Xは旅」という「旅のメタファー」及び関連する概念メタファーに着目する。しかし取り上げている表現は、マッカーリスの演説における以下の部分である。

- ① 「我々自身の完成そのものに向けた旅としての：ヨーロッパという観念」
- ② 「サウジアラビアとアイルランドは、長い道を旅してきた」
- ③ 「彼らは自分の国を、最も爽快な、平和の旅に出発させた」
- ④ 「国家の舵をとっている方への乾杯に唱和して下さい」
- ⑤ 「平等主義的な共和国の偉大な目的地は、我々の手の届く所にある」(pp.127-128)。

①・③の「旅」、②の「旅してきた」、④の「舵をとっている」、及び⑤の「目的地」はへ比喩的表現である。

Drulák 2008は「メタファーに着目した国際政治研究は方法的に充分に発達していないままである」という認識に立ち、「国際政治ディスコースのメタファーを研究可能にする方法」の提示を目的とする(p.105)。そうした「方法」には、「概念メタファーの演繹」、「メタフォリカルな表現の探索」、「概念メタファーの修正」などの「ステップ」が含まれる(p.107)。同論文はこれらの「ステップ」の具体例を、Drulák 2006 (EU加盟国・加盟候補国の代表による演説七四点から成るコーパスを使用) から引いている(pp.109-112)。

両論文には、前述の二条件を満たす表現を取り上げている箇所がある(Drulák 2008, p.112; Drulák 2006, p.517)。しかし、Drulák 2006がへ比喩的表現の分類法を概念メタファーに適用していることに注意しよう。著者は、「運動としてのEU」という概念メタファーを「沈殿した(sedimented)」、「容器の平衡としてのEU」及び「容器としてのEU」という概念メタファーを「慣例的(conventional)」、「新しい中世としてのEU」及び「企業としてのEU」という概念メタファーを「非慣例的(unconventional)」と呼んでいる(pp.512-516)。しかし「沈殿した、慣例的、非慣例的」という分類法の説明は、へ比喩的表現に即して行っている。「フランスはドイツと同盟した」のような沈殿したメタファーは、メタファーと理解されることは全くない。「中略」それは、「死んだメタファー」と呼ばれることがある。「中略」ヨーロッパ連合には三つの柱がある』のような慣例的メタファーは、メタファーと認識される。しかしそれは、「中略」さらに説明を加えることを要しない。対照的に、非慣例的メタファーは「中略」通常のコミュニケーションにおいて大抵は理解されない。たとえば「現在は慣例化している」EUの柱という観念は、将来のEUの非慣例的な描写のうちの一つとして、一九八〇年代末に初めて導入された」(p.507)。この箇所では、Drulák 2006はへ比喩的表現に着目し、その分類法を概念メタファーに適用している。Drulák 2008に「こうした点を撤回したことを示す箇所は見当たらない。(同論文は「沈殿した、慣例的、非慣例的」という分類は取り上げていないが、「沈殿したメタファー」には

言及している (p.110)。

以上、着目している表現が〈字義通りの意味を持つと認識される〉という条件を満たしているかという角度から、諸文献を検討してきた。そうした条件を満たしていると無条件に述べ得るものはないと考える。

二 表現と概念メタファー

レイコフらによれば、「概念システムの中にメタファーがある」ので、「メタフォリカルな表現」が成り立つ (Lakoff and Johnson 1980, p.6)。たとえば、「痛み」(「目標」概念)の要素と「存在物」(「起点」概念)の要素の間に対応がある故に、「痛みが消えた」(Takoff and Johnson 1980, p.50)という表現が成り立つ。言い換えれば、この表現は抽象概念「痛み」を中心とし、それが「存在物」に基づいて構築されている故に成り立つ。「痛みが消えた」は、〈抽象概念を含む概念メタファーに由来する〉という条件を満たしている。それ故、「痛みが消えた」から、〈抽象概念を含む概念メタファーに由来する〉という条件を満たしている。なお、この概念メタファーに由来する表現に、「起点」概念である「存在物」は含まれないことに注意しよう。

注6で言及したCienki 2005は、米大統領選挙における候補者討論について学生に試行的な分析を行わせ、その結果に關し次のように述べている。「学生たちはこれ『違いを無視すべきではありません：違いは理解しなければなりません』という候補者の発言」を、『道徳性は共感』『中略』を直接表す『中略』メタフォリカルな表現として選んだ。しかし『中略』道徳性ではなく『違い』が語られている。この発言にメタフォリカルなものとすれば、それは違いを—無視あるいは理解可能な—存在物 (entity or being) と特徴づけることである (p.266)。候補者の発言の中心は「違い」であり、「無視すべきではありません」等は、「違い」が「存在物」に基づいて構築されている故の表現である

—著者はこのように論じている。(但し、候補者討論の分析本体においては、著者は概念メタファーに由来する表現に着目していない。)

以下、〈抽象概念を含む概念メタファーに由来する〉という条件を満たしているかという角度から、まず「家族」に関わる文献二点を検討し、次に「メタファー」を特定する手順に関わる文献四点を検討しよう。

家族

Adams 2009 は、一九八〇年代以降の米国の選挙における候補者討論を取り上げ、「核家族」に関わる語の使用を分析している。著者によれば、「ここで詳論する三つの概念メタファーは、討論における候補者家族への言及のうち、極めて多数のものを説明している」(pp.188-189)。

概念メタファー「核家族は熟達 (A NUCLEAR FAMILY IS MASTERY)」^⑤に由来する表現として、以下が挙げられている (pp.188, 190-193)。

- ① 「ジョー・ロジャーズは「中略」二児の父親です」(傍線は原文下線。②〜⑩についても同じ—引用者)
- ② 「私に州上院議員になる資格を与えるのは、私が親であり、夫であり、ラス・ヴェガスに住む二人の高齢者の息子であるという事実です」
- ③ 「私は幸運にも、愛情に満ちた家族の一員です」
- ④ 「アンダーソン氏は「中略」現在独身です」、「J・D・ヘイワースは「中略」ノース・カロライナ州立大学で学び、夫人と三人のお子さんがいます」、「オーウェンズ氏には、夫人と二人のお子さんがいます」
- ⑤ 「これ「選挙戦」が終われば、私は他のこと「核家族をつくること」に取りかかるつもりです」
- ⑥ 「ホールの台車に、私の履歴を書いたカードが置いてあります」
- ⑦ 「キャロル・ラミランドです。妻であり、母親であり、教師です」

⑧ 「私は妻であり、母親であり、農業者です」

⑨ 「彼には、素敵な夫人と素敵なお子さんと立派な家族がいます」、「彼女にはとても、とても素晴らしい夫ビルがいることを、私は知っています。彼女のお子さんの少なくとも一人には、会ったことがあります。彼女にも、「私と」同じように、立派な家族がいると思います」

以上の①、②、④、⑥、⑦、及び⑧において、抑も「目標」概念の「核家族」は用いられていない。従って、これらは概念メタファー「核家族は熟達」に由来していない。③及び⑨においては「家族」が用いられ、⑤においては実質的に「家族」が言及されている。しかし③、⑤、及び⑨それぞれの傍線部から、「家族」が「熟達」に基づいて構築されているとは推測し得ない。たとえば③の「幸運にも」、「愛情に満ちた」、及び「の一員です」から、「家族」が「熟達」に基づいて構築されているとは推測し得ない。従って各傍線部は、「家族」が「熟達」に基づいて構築されている故の表現ではない。

概念メタファー「地元で生まれたことは熟達 (A NATIVE BIRTH IS MASTERY)」¹⁰に関しては、以下の表現が挙げられている (pp.195-196)。

⑩ 「私はアリゾナ生まれです」「中略」テンペ生まれの妻と、テンペで出会いました。彼女の両親もテンペ生まれです。ですから、私はここテンペにある程度根を張っていると言えらると思います」

⑪ 「私たちの二人の娘は、幸運にもここで生まれました…ですから、私にはここテンペで生まれるだけの先見の明はありませんでしたが、このコミュニティにはある程度の利害関係があると思います」

⑫ の「アリゾナ生まれ」、「テンペ生まれ」、また⑬の「ここで生まれました」、「ここテンペで生まれる」は、上記の概念メタファーの「目標」概念である「地元で生まれたこと」に対応している。しかし⑭及び⑮それぞれの傍線部から、「地元で生まれたこと」が「熟達」に基づいて構築されているとは推測し得ない。たとえば⑬の「先見の明はありませ

んでした」から、「ここテンペで生まれる「こと」が「熟達」に基づいて構築されているとは推測し得ない。従って各傍線部は、「地元で生まれたこと」が「熟達」に基づいて構築されている故の表現ではない。

著者は、概念メタファーとして「核家族の構成員は候補者 (NUCLEAR FAMILY ARE CANDIDATES)」も取り上げている (pp.197-201)。しかし「核家族の構成員」は、レイコフらの議論における抽象概念ではない。従って、「核家族の構成員は候補者」は「概念メタファー」ではない。

以上述べてきたように、著者により取り上げられている表現が、提示されている概念メタファーに由来していない場合がある (③、⑤、⑨、⑩、及び⑪)。また、抑も取り上げられている表現に、概念メタファーの「目標」概念が含まれていない場合がある (①、②、④、⑥、⑦、及び⑧)。概念メタファーとして提示されているものに、抽象概念が含まれていない場合もある。

Ahrens and Lee 2009 は、アメリカ連邦上院における議員の演説 (二〇〇〇年～二〇〇七年) の分析である。Lakoff 1996/2002 が現代アメリカ政治に関し提示した「厳格な父親 (Strict Father (SF)) モデル」及び「育成的な親 (Nurturant Parent (NP)) モデル」を取り上げている。前者と結びつく主たる概念メタファーは、「道徳性は力」及び「道徳性は権威」である。後者と結びつく主たる概念メタファーは、「道徳性は育成」及び「道徳性は共感」である (p.63)。

議員が何れのモデルに依拠するかに、その所属政党の違い・性別は影響するか―著者はこの点を明らかにするため、議員十二人の演説における「SF 語彙素 (lexeme)」及び「NP 語彙素」の使用頻度に着目する (pp.62-63, 65)。「SF 語彙素」は「SF モデル」と結びつく語彙素で、具体的には「力」及び「権威」、そしてそれぞれの定義に含まれる語及びそれぞれの上位語である。「権威」の定義に含まれる語の一例は、「権利」である (p.65)。「NP 語彙素」は「NP モデル」と結びつく語彙素で、具体的には「育成」及び「共感」、そしてそれぞれの定義に含まれる語及びそれぞれ

の上位語である。「育成」の定義に含まれる語・「育成」の上位語の一例は、「配慮」である (pp.65-66)。「私は公民権を剝奪された (disenfranchised) 有権者の投票する権利 (voting rights) のため、一生懸命戦ってきました」という文 (p.73) において、「SF 語彙素」が一点使用されていることになる。

しかし、「力」等の「SF 語彙素」及び「育成」等の「NP 語彙素」は、「道徳性は力」、「道徳性は育成」等の概念メタファーの「起点」概念そのものである。これらの語彙素は、「道徳性」が「力」・「育成」等に基づいて構築されている故の表現ではない。しかも著者は、右の「私は公民権を剝奪された有権者の投票する権利のため、一生懸命戦ってきました」という文を含め、諸演説から八点の文を引用しているが (pp.72-73)、「道徳性」を含むものはない。このことから、著者は抑も概念メタファーの「目標」概念を含む文に焦点を合わせていないことがうかがわれる。

「メタファー」を特定する手順

最後に、「メタファー」を特定する手順に重きをおく文献四点を取り上げよう。

Stefanowitsch and Goschler 2009 は、「メタファー」の概念理論 (Lakoff and Johnson 1980, Lakoff and Turner 1989, Lakoff 1993) を前提に、話者の男女の別及びイデオロギーの違いにより「空間的メタファー」の使用頻度は異なるか、というテーマを設定している (pp.166-170)。使用しているのは、ドイツ連邦議会の議事録である (pp.168, 172)。

著者が議事録中の「空間的メタファー」を特定する手順は、次の通りである。議事録から「空間的名詞」(「目的地」など)、「空間的動詞」(「行く」など)、及び「空間的前置詞」(「前に」など)を取り出す。そして、「当の語を含む文の」真理条件」が「具象物 (concrete object) の位置、あるいは位置の変化、への言及」を必要としなければ、当の語を「空間的メタファー」と判断する。一例を挙げれば、議事録中の「彼は経済原則に基づいて、すなわち割当を用いて、この目標に到達する (erreichen) ことを提案した」における「到達する」は、「空間的メタファー」である。「この文が真であるためには、参加者の誰も空間的位置を変える必要はない」からである (pp.170-173)。

この文における「到達する」は、抽象概念「目標」が「目的地」に基づいて構築されていることに由来する―このように解釈すれば、「到達する」は、レイコフらの議論における「メタフォリカルな表現」である。^①著者の手順に基づいて「空間的メタファー」と判断される語は、「メタフォリカルな表現」でもあり得る。しかし、「彼女は見えない昇進の壁におじかした (she reached a glass ceiling)」における reached を考えよう。これは「空間的メタファー」ではある。しかしこの文に抽象概念は含まれず、reached は概念メタファーに由来する表現ではない。「空間的メタファー」には、レイコフらの議論における「メタフォリカルな表現」でないものも含まれる。

次に、Pragglejaz Group 2007 が提示した「メタファー特定手順」を用いる研究三点を取り上げよう。

Cienki 2008 は、「概念メタファー理論」が政治研究に従来どのように応用されてきたか、そして今後どのように応用され得るか、について論じている。素材は、二〇〇〇年の米国大統領選挙における候補者討論の記録から抽出された、「メタフォリカルな表現」を含む文である。

Koller and Semino 2009 及び Semino and Koller 2009 は、「概念メタファー理論 (Lakoff and Johnson 1980; Kövecses 2002)」と「社会構築主義的なジェンダー観 (Sunderland 2004)」を組み合わせ、「男女の政治家のメタファー選択における相違と類似性を「中略」説明することを試みる」(Semino and Koller 2009, p.36)。Koller and Semino 2009 はドイツの政治家の演説・インタビュー、Semino and Koller 2009 はイタリアの政治家の演説・インタビューから、「メタフォリカルな表現」を抽出している。

さて、三つの論文何れも、「メタフォリカルな表現」を抽出するにあたり、Pragglejaz Group 2007 が提示した「メタファー特定手順」を用いている (Cienki 2008, pp.247-248, 250; Koller and Semino 2009, p.16; Semino and Koller 2009, p.40)。これは、「語彙単位の文脈上の意味が、その基礎的な意味と対照的であるが、前者が後者との比較により理解可能である」場合、当該文脈中のその「語彙単位」を「メタフォリカル」なものと判断する、という手順である。

「文脈上の意味」と「基礎的な意味」が相異なる場合、後者は「より具体的である」「中略」、身体行動に関係する、「より精密である」「中略」、歴史的に先行する」(Pragglejaz Group 2007, p.3)。

Pragglejaz Group 2007 は、この手順を次の文に適用している。「For years, Sonia Gandhi has struggled to convince Indians that she is fit to wear the mantle of the political dynasty into which she married, let alone to become premier (ソニア・ガンジーは、嫁ぎ先の政治王朝の継承に彼女がふさわしいことをインド人に納得させようと、長年四苦八苦してきた。首相にふさわしいことを納得させようと四苦八苦してきたことは、言うまでもない)」。そして struggled 'fit' wear 'mantle' 'dynasty' 及び into を、「メタフォリカル」なものと判断している (p.p.3, 5-6, 8-11)。レイコフらの観点からは、into は 'dynasty' 概念の「容器」概念に基づく構築に由来する「メタフォリカルな表現」であろう。⁽²³⁾しかし struggled 及び fit は、抽象概念に関して使用されておらず、概念メタファーに由来する表現ではない。Wear the mantle 及び dynasty は、＜比喩的表現＞である。

以上に見られるように、Pragglejaz Group 2007 の「メタファー特定手順」に基づいて「メタフォリカル」と判断される表現には、概念メタファーに由来しない表現及び＜比喩的表現＞が混在する。従って前記の三つの論文が抽出する「メタフォリカルな表現」にも、それらが混在していることになる。

以上、着目している表現が＜抽象概念を含む概念メタファーに由来する＞という条件を満たしているかという角度から、諸文献を検討してきた。そうした条件を満たしていると無条件に述べ得るものはないと考える。

おわりに

最近の諸文献を検討し、言語表現に関し概念メタファー論が提示する三分法が充分に活かされていないことを指摘し

た。(諸文献からは、〈比喩的表現〉に対する関心の強さ、また、抽象概念を中心とする表現に対する関心の弱さがうかがわれる。) 概念メタファー論を政治的言語の考察に適用する際、焦点を合わせるべきは〈抽象概念を含む概念メタファー〉に由来し、字義通りの意味を持つと認識される表現であるという点を確認し得たと考える。

最後に、前記の三分法から成る枠組みに即し政治的言語を考察することの意義について述べ、締めくくりとしよう。

〈抽象概念を含む概念メタファー〉に由来し、字義通りの意味を持つと認識される表現が、その抽象概念に対応する抽象物に関して使用される場合がある。たとえば「大きな権力」は、〈権力は存在物〉という概念メタファーに由来し、字義通りの意味を持つと認識される表現である。そして、それは権力という抽象物に関して使用されている。

さて「はじめに」で述べたように、レイコフらの議論に従えば、抽象概念に対応する抽象物(「メタフォリカルな物」)は、抽象概念の「存在物」に基づく構築を通じ指定されたものである。政治的「現実」の重要な構成要素である抽象物は、概念メタファーに基礎を持つ。言い換えれば、政治的「現実」には、概念メタファーを通じて構成される側面がある。

かくて、個々の言語表現を手がかりに概念メタファーを特定することは、政治的「現実」の一面―意識されないまま構成される側面―を浮き彫りにするための一手段を成す。また、そうした表現を手がかりに特定した概念メタファーの批判的検討は、政治的「現実」の批判的検討の一手段を成す。前記の三分法から成る枠組みを政治的言語の考察に活かすことは、政治的「現実」の記述及び批判に資するところがあると言えよう。

(1) 以下は、〈比喩的表現〉に焦点を合わせた研究の例である(括弧内は、当該文献の着目点である)。Novak 1992 (「読み書き能力に関する極めて狭い、不完全な見方」と結びつく「比喩的表現」(pp.223, 230))、Pancake 1993 (「説得の道具」(p.282))として「表現」、Elwood 1995 (「麻薬に対する戦争」という「一九八〇年代のアメリカ」大統領のレトリックにおけるメタファー」

(p.106) 'O'Brien 2003 (「移民を中傷するように考察されたメタフオリカルな言語」(p.35))' Charteris-Black 2005 (「語句の使用の、それが生ずると予期されるコンテキストあるいは領域から、それが生ずると予期されない別のコンテキストあるいは領域への移行「中略」から結果する」ものとしての「メタファー」(p.14))。

(2) 認知意味論諸分野の概観の中で彼らの概念メタファー論を取り上げている文献として、「松本二〇〇三年」及び「深田・仲本二〇〇八年」参照。

(3) Lakoff and Johnson 1980, pp.3, 5, 8-10, 50, 53, 59-60, 85, 115, 119, 144-145; Lakoff 1987, pp.235-296; Lakoff and Turner 1989, pp.62-63; Lakoff 1993, pp.203-205, 226, 244-245; Lakoff 1994, p.42; Lakoff 1996, p.60; Lakoff and Johnson 1999, pp.3, 52-53, 73, 497; Lakoff and Núñez 2000, pp.39, 46; Lakoff and Johnson 2003, pp.252-253, 272. 詳細については「大河原二〇〇九年(一一〇一―一〇六頁)」及び「大河原二〇一一年(七二―七五頁)」参照。

(4) レイコフらの議論に従えば、〈抽象概念を含む概念メタファーに由来する〉という条件を満たす表現は、〈字義通りの意味を持つと認識される〉という条件を満たす。これら二つの条件は、別個のものではない。しかし、レイコフらの議論に依拠するという外観を持つ文献において、着目されている表現が比喩的なものである場合がある。そうした場合、着目されている表現と概念メタファーの関係を検討するまでもなく、その文献は実質的にレイコフらの議論に依拠していないと判断可能である。概念メタファーとの関係の検討を必要としない表現と、それを必要とする表現の区別は、諸文献を整理する上で有用である。それ故、ここでは〈字義通りの意味を持つと認識される〉という条件を、〈抽象概念を含む概念メタファーに由来する〉という条件から独立させている²⁹。

レイコフらの議論に対する批判で、概念メタファーに由来する表現を、被験者は必ずしもその概念メタファーに即して理解しないという実験結果を示すものがある。しかし実際には、実験に用いられている表現に、本文で述べた二条件を満たさないものが含まれている (Glucksberg, Brown, and McGlone 1993, p. 719; McGlone 1996, pp.561-562; Glucksberg and McGlone 1999, p.1546; Keysar, Shen, Glucksberg, and Horton 2000, pp.580-582)。それ故、そうした批判は説得力を欠いている。

Leezenberg 2001 は、Lakoff and Johnson 1980 が挙げる概念メタファーに、適切でないものがあると指摘する。「心は機械」あるいは『心は砕けやすい物体』のような概念は、我々は活力を失いつつある、彼は泣き崩れた、彼は精神的に参ってしまつたという文に含まれると主張されている。しかし、これらの文において心は触れられておらず、必ずしも含意されていない (p.10)。これは的確な指摘であろう。

レイコフらの概念メタファー論に対する批判全般について、「大河原二〇〇九年(一〇六一―一二頁)」参照。

(5) Semino 2008 は、政治だけでなく文学、科学・教育などの領域も取り上げている。同書には、注6で簡単に言及するにとどめ

る。

(6) 諸文献(本文で言及した書籍三点を除く)を概観しよう。

以下は、レイコフらの概念メタファー論に(少なくとも部分的に)依拠するという外観を持つものの、(字義通りの意味を持つと認識される表現)ではなく、(比喩的表現)に焦点を合わせている(括弧内は、(比喩的表現)に焦点を合わせていることを示す箇所である)。対外政策に関する Shimko 1994 (pp.656, 658, 660, 662-663, 666) 及び Shimko 2004 (pp.202, 206-207, 210-212) 難民・移民をめぐるデイスコースに関する El Refaie 2001 (pp.354, 359-360, 368) グローバリゼーションをめぐるデイスコースに関する Lule 2004 (pp.182, 184-187) 及び Eubanks 2005 (p.184) 勢力均衡に関する Little 2007 (p.33) ヨーロッパをめぐるデイスコースに関する Musolf 2008 (pp.317-318)。なお、本文で述べた二条件を満たす表現及び(比喩的表現)の両者を取り上げている文献として、トクヴィルの『アメリカのデモクラシー』に関する Kovacs 1994 (pp.117-127) 冷戦・冷戦後のデイスコースに関する Schaffner 1995 (pp.82-85, 89) 及びテクストの「スタイル」と「イデオロギー」に関する Wolf and Polzenhagen 2003 (pp.255, 264) がある。

以下は、レイコフらの概念メタファー論に(少なくとも部分的に)依拠するという外観を持つものの、(抽象概念を含む概念メタファーに由来する)という条件を満たさない表現に焦点を合わせている(括弧内は、そうした表現に焦点を合わせていることを示す箇所である)。対外政策のデイスコースに関する Lakoff 1992 (p.464) 「ゲームと遊びのメタファー」に関する Ching 1993 (pp.56-57) マス・メディアの報道に関する Sandickioglu 2000 (pp.308-317) 銃規制を求める運動に関する Hayden 2003 (pp.202, 206, 207) 選挙における候補者討論に関する Cienki 2004 (pp.414, 417, 420) 及び Cienki 2005 (pp.287, 290-291) 観念の伝播・普及に関する Chilton 2005 (pp.35-37)。なお Lakoff 1996/2002 は、(抽象概念を含む概念メタファーに由来する)という条件を満たさない表現 (pp.5-6, 62, 71, 92, 114) 及び(比喩的表現) (pp.56-57, 71, 88) の両者を取り上げている。

取り上げている諸表現中、本文で述べた二条件を満たす表現(比喩的表現)及び(抽象概念を含む概念メタファーに由来する)という条件を満たさない表現が混在する文献として、以下がある。安全保障及びヨーロッパをめぐるデイスコースに関する Thornborrow 1993 (pp.106-107, 111, 113-115) 対外政策のデイスコースに関する Rohrer 1995 (pp.117, 118-120, 124, 128) 冷戦及びその終結時のデイスコースに関する Chilton 1996 (pp.62, 65, 67, 70-71, 91, 100, 112-113, 138-152, 193, 195, 264, 430-433) アメリカの対外政策過程をめぐるデイスコースに関する Milhken 1996 (pp.220-223) ヨーロッパ・ヨーロッパ統合をめぐるデイスコースに関する Schaffner 1996 (pp.37-43, 43-51, 53-55) 移民をめぐるデイスコースに関する Santa Ana 2002 (pp.74, 83, 89, 176, 183, 196, 203, 208, 231 等々) マス・メディアの報道に関する White and Herrera 2003 (pp.284, 301, 304, 306-307, 310) イデオロギー的なディ

- スコースに関する Zinken 2003 (pp.514-515, 517-518)、「政治」文学「科学・教育などのディスコースに関する Semino 2008 (pp. 81-82, 87-90, 92-96, 98, 101, 103, 105, 110-111, 113)。
- (7) 「今X―それ自体としては無害であるか、少なくともそれほど悪くない―を受け入れれば、引き続き将来必ず起こるのはY―我々全員(あるいは我々のほとんど)が悪いと考えること―である」(p.26) という形式の議論である。
- (8) 第二の事例分析においては、「科学的根拠」という〈全体〉により「実験的に得られた根拠」という〈部分〉を指すという「修辞」が取り上げられている (p.233)。そうした「修辞」がモデルに関する著者の議論とどのように関係するかは、明らかでない。
- (9) ここでの「熟達」は、「候補者が、異性間の結合―それは安定と責任の表れとしても認識される―が好ましい」という社会規範に従ってゐること」を内容としている (p.189)。
- (10) ここでの「熟達」は、「諸問題に関する情報に精通してゐること」を内容としている (p.197)。
- (11) 概念メタファー「目標は目的地」に関する Lakoff 1993 (p.226) 及び Lakoff and Johnson 1999 (pp.52-53) の議論参照。
- (12) その中心的文献として、Lakoff and Johnson 1980 及び Lakoff and Johnson 1999 が挙げられている (p.241)。
- (13) 概念メタファー「社会集団は容器」に関する Lakoff and Johnson 1980 (pp.59-60) の議論参照。

文献リスト

- 大河原伸夫、二〇〇九年、「政治的ディスコースにおける概念構築の型」、関口正司編『政治における「型」の研究』風行社。
- 大河原伸夫、二〇一一年、「幕末・明治期における西洋の政治的諸概念の加工」、松永典子、施光恒、吉岡斉編『知の加工学』事始め』新宿書房。
- 深田智・仲本康一郎、二〇〇八年、『概念化と意味の世界』研究社。
- 松本曜(編)、二〇〇三年、『認知意味論』大修館書店。
- Adams, K. L. 2009, "Conceptual Metaphors of Family in Political Debates in the USA" in Ahrens 2009.
- Ahrens, K. (ed.) 2009. *Politics, Gender and Conceptual Metaphors*, Palgrave Macmillan.
- Ahrens, K., and S. Y. M. Lee. 2009. "Gender versus Politics" in Ahrens 2009.
- Carver, T., and J. Pikalo. (eds.) 2008. *Political Language and Metaphor*, Routledge.
- Charrens-Black, J. 2005. *Politicians and Rhetoric*, Palgrave Macmillan.
- Chilton, P. 1996. *Security Metaphors*, Peter Lang.
- Chilton, P. 2005. "Manipulation, Memes and Metaphors" in L. de Saussure and P. Schulz, eds., *Manipulation and Ideologies in*

- the Twentieth Century*, John Benjamins.
- Chilton, P., and G. Lakoff. 1995. "Foreign Policy by Metaphor" in Schäffner and Wenden 1995.
- Ching, M. K. L. 1993. "Games and Play." *Metaphor and Symbolic Activity*, 8(1), pp.43-65.
- Cienki, A. 2004. "Bush's and Gore's Language and Gestures in the 2000 US Presidential Debates," *Journal of Language and Politics*, 3(3), pp.409-40.
- Cienki, A. 2005. "Metaphor in the 'Strict Father' and 'Nurturant Parent' Cognitive Models," *Cognitive Linguistics*, 16(2), pp.279-312.
- Cienki, A. 2008. "The Application of Conceptual Metaphor Theory to Political Discourse" in Carver and Piskalo 2008.
- Dirven, R., R. Frank, and M. Pütz. (eds.) 2003. *Cognitive Models in Language and Thought*, Mouton de Gruyter.
- Druľák, P. 2006. "Motion, Container and Equilibrium," *European Journal of International Relations*, 12(4), pp.499-531.
- Druľák, P. 2008. "Identifying and Assessing Metaphors" in Carver and Piskalo 2008.
- El Refaie, E. 2001. "Metaphors We Discriminate By," *Journal of Sociolinguistics*, 5(3), pp.352-71.
- Elwood, W. N. 1995. "Declaring War on the Home Front," *Metaphor and Symbolic Activity*, 10(2), pp.93-114.
- Eubanks, P. 2005. "Globalization, 'Corporate Rule,' and Blended Worlds," *Metaphor and Symbol*, 20(3), pp.173-97.
- Glucksberg, S., M. Brown, and M. S. McGlone. 1993. "Conceptual Metaphors are not Automatically Accessed during Idiom Comprehension," *Memory and Cognition*, 21(5), pp.711-19.
- Glucksberg, S., and M. S. McGlone. 1999. "When Love is Not a Journey," *Journal of Pragmatics*, 31, pp.1541-58.
- Hayden, S. 2003. "Family Metaphors and the Nation," *Quarterly Journal of Speech*, 89, pp.196-216.
- Hidalgo Tenorio, E. 2009. "The Metaphorical Construction of Ireland" in Ahrens 2009.
- Honohan, I. 2008. "Metaphors of Solidarity" in Carver and Piskalo 2008.
- Johnson, M. (ed.) 1981. *Philosophical Perspectives on Metaphor*, University of Minnesota Press.
- Keyser, B., Y. Shen, S. Glucksberg, and W. S. Horton. 2000. "Conventional Language," *Memory and Language*, 43(4), pp.576-93.
- Kövecses, Z. 1994. "Tocqueville's Passionate 'Beast'," *Metaphor and Symbolic Activity*, 9(2), pp.113-33.
- Kövecses, Z. 2002. *Metaphor*, Oxford University Press.
- Koller, V., and E. Semino. 2009. "Metaphor, Politics and Gender" in Ahrens 2009.
- Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things*, University of Chicago Press.

- Lakoff, G. 1992. "Metaphor and War" in M. Pütz, ed., *Thirty Years of Linguistic Evolution*, John Benjamins.
- Lakoff, G. 1993. "The Contemporary Theory of Metaphor" in A. Ortony, ed., *Metaphor and Thought*, 2nd edition, Cambridge University Press.
- Lakoff, G. 1994. "What Is a Conceptual System?" in W. F. Overton and D. S. Palermo, eds., *The Nature and Ontogenesis of Meaning*, Lawrence Erlbaum.
- Lakoff, G. 1996 (2002). *Moral Politics* (Moral Politics, 2nd edition), University of Chicago Press.
- Lakoff, G., and M. Johnson. 1980/2003. *Metaphors We Live By*, University of Chicago Press.
- Lakoff, G., and M. Johnson. 1999. *Philosophy in the Flesh*, Basic Books.
- Lakoff, G., and M. Johnson. 2003. "Afterword, 2003" in Lakoff and Johnson, *Metaphors We Live By*, 2003.
- Lakoff, G., and R. E. Núñez. 2000. *Where Mathematics Comes From*, Basic Books.
- Lakoff, G., and M. Turner. 1989. *More than Cool Reason*, University of Chicago Press.
- Leezenberg, M. 2001. *Contexts of Metaphor*, Elsevier.
- Little, R. 2007. *The Balance of Power in International Relations*, Cambridge University Press.
- Lule, J. 2004. "War and its Metaphors," *Journalism Studies*, 5(2), pp. 179-90.
- McGlone, M. S. 1996. "Conceptual Metaphors and Figurative Language Interpretation," *Journal of Memory and Language*, 35, pp.544-65.
- Meier, P., and E. Lombardo. 2009. "Power as a Conceptual Metaphor of Gender Inequality?" in Ahrens 2009.
- Milliken, J. L. 1996. "Metaphors of Prestige and Reputation in American Foreign Policy and American Realism" in F. A. Beer and R. Hariman, eds., *Post-Realism*, Michigan State University Press.
- Musolff, A. 2008. "The Embodiment of Europe" in R. M. Frank, R. Dirven, T. Ziemke, and E. Bernárdez, eds., *Body, Language and Mind, Volume Two: Sociocultural Situatedness*, Mouton de Gruyter.
- Musolff, A. 2010. *Metaphor, Nation and the Holocaust*, Routledge.
- Novak, E. M. 1992. "Read It and Weep," *Discourse and Society*, 3(2), pp.219-33.
- O'Brien, G. V. 2003. "Indigestible Food, Conquering Hordes, and Waste Materials," *Metaphor and Symbol*, 18(1), pp.33-47.
- Panacke, A. S. 1993. "Taken by Storm," *Metaphor and Symbolic Activity*, 8(4), pp.281-95.
- Pragglejaz Group. 2007. "MIP," *Metaphor and Symbol*, 22(1), pp.1-39.

- Ringmar, E. 2008. "Metaphors of Social Order" in Carver and Pikalo 2008.
- Rohrer, T. 1995. "The Metaphorical Logic of (Political) Rape." *Metaphor and Symbolic Activity*, 10(2), pp.115-37.
- Sandkicioglu, E. 2000. "More Metaphorical Warfare in the Gulf" in A. Barcelona, ed., *Metaphor and Metonymy at the Crossroads*, Mouton de Gruyter.
- Santa Ana, O. 2002. *Brown Tide Rising*. University of Texas Press.
- Schäffner, C. 1995. "The 'Balance' Metaphor in Relation to Peace" in Schäffner and Wenden 1995.
- Schäffner, C. 1996. "Building a European House?" in A. Musolf, C. Schäffner, and M. Townson, eds., *Conceiving of Europe*, Dartmouth Publishers.
- Schäffner, C., and A. L. Wenden. (eds.) 1995. *Language and Peace*, Dartmouth Publishers.
- Semino, E. 2008. *Metaphor in Discourse*, Cambridge University Press.
- Semino, E., and V.Koller. 2009. "Metaphor, Politics and Gender" in Ahrens 2009.
- Shimko, K. L. 1994. "Metaphors and Foreign Policy Decision Making." *Political Psychology*, 15(4), pp.655-71.
- Shimko, K. L. 2004. "The Power of Metaphors and the Metaphors of Power" in F. A. Beer and C. De Landtsheer, eds., *Metaphorical World Politics*, Michigan State University Press.
- Stefanowitsch, A., and J. Goschler. 2009. "Sex Differences in the Usage of Spatial Metaphors" in Ahrens 2009.
- Stenvoll, D. 2008. "Slippery Slopes in Political Discourse" in Carver and Pikalo 2008.
- Sunderland, J. 2004. *Gendered Discourses*, Palgrave Macmillan.
- Thornborrow, J. 1993. "Metaphors of Security." *Discourse and Society*, 4(1), pp.99-119.
- Vertessen, D., and C. De Landtsheer. 2008. "A Metaphorical Election Style" in Carver and Pikalo 2008.
- White, M., and H. Herrera. 2003. "Metaphor and Ideology in the Press Coverage of Telecom Corporate Consolidations" in Dirven, Frank, and Pitz 2003.
- Wolf, H.-G., and F. Polzenhagen. 2003. "Conceptual Metaphor as Ideological Stylistic Means" in Dirven, Frank, and Pitz 2003.
- Yanow, D. 2008. "Cognition Meets Action" in Carver and Pikalo 2008.
- Zinken, J. 2003. "Ideological Imagination," *Discourse and Society*, 14(4), pp.507-23.